

---

# 命日の夜

焰氷水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

命日の夜

### 【Zコード】

N2747A

### 【作者名】

焰氷水

### 【あらすじ】

祖母の命日の夜。一人、留守番する少女は夜半に奇怪な音に気付く。近づいてくる音。恐怖する少女はベッドから動けなくなり……。

## 気配

夏の夜。

暑苦しげに千佳は寝付けないでいた。  
今日はお父さんもお母さんも帰つてこない。  
あまり広くない家なのに、今口は妙に広く感じじる。  
早く寝てしまおう。固く両を瞑り、縮こまるようにして寝ようとする。

（ダメだ、寝れないや……）

寝たいのに、頭は一向に冴えたままだ。

ガターン

誰もいなはずの家の中で突如大きな音がする。  
ビクつとした千佳は声も出ず、動けない。

（……な、なに、いまの……）

じつと背中が汗ばむ気がしたのに、なぜか寒気がする。  
音は聞こえてこない。

「気のせい……だよね」

自分に言い聞かせるように声に出す。しかし。  
ひたひたと何かが近づいてくる音が聞こえてきた。  
今度こそ、千佳は完全に動けなかつた。

## 止まない音

ひた……ひた……  
音は止まない。

確実に千佳に迫っていた。

そして、怖くて鋭敏になつた千佳の聴覚こなれで嫌な音が混ざる。

ぴけしゃ……ぴけしゃ……ぴけしゃ……  
雲が落ちるような音。

(いや……いや、いないで……)

千佳の思惑とは裏腹に音はもつすぐそこでしていた。  
こんなときに限って部屋のドアは開け放しだった。

(わああっ……ばかばか自分のはかっ……)

少しでも涼しくしようとしてドアを開けてしまつていて自分に悪態をつぐが、この現状の打破になんら繋がるわけではない。

そして、音の気配は部屋の前で止まる。まるで、最初から「」を目指していたかのように。

(お願い……あっちへ行つて……お願いつ)

願いもなしく音は部屋へと入つてくる。

千佳のベッドの前で止まる。音はすぐ足元でしていた。

(いや……)

声すら出ない。呼吸すらも止めていた。

なぜか、音の気配はそのままやこに佇んでいた。

ハア……ハア……ハア……

荒い獣のような声だけが部屋にこだまする。  
動かない千佳、動かない音。

数瞬の時だつたはずだが、千佳には永遠のよみを感じる。  
動いたらやばいよみがする。直感的に千佳は悟つていた。

でも。

(……何がいるんだうつへ)

好奇心旺盛な12歳の女の子はその興味に勝てなかつた。顔をそーと上げ、掛け布団越しに覗こうとした。ガバつ

瞬間、音の主、黒い影が顔に向かつて飛び掛つてきた。

「いやああああー やめてつー 殺さないでつー！」

千佳は声のあらん限り泣き叫ぶ。

黒い影は顔に纏わり付いたまま、べろべろと千佳の顔を舐めあげる。

「いや、やめて、やめてつたら、変態…………！」

「つまんつ」

黒い影が吠える。

……吠える？

「…………えーと、ジヨン？」

「つまんつ、わうう」

黒い影が甘えるように鳴く。とこりか黒い影じゃなくて家で飼つている犬のジヨンだ。

「もうつ、齧かさないでよ、ジヨンつたらー！」

千佳はべりつとジヨンを顔から引き剥がすとぺしつとその頭をはたいた。

「…………くうううん」

怒られたジヨンは頭をうなだらせてしまつ。

「まったく……どつから入つたのよ。大体鎖だつてつけてたのに……」

「…………」

そこで、気づいてしまつた。

恐怖は気づかなければ恐怖ではないのに。  
もう遅かった。

そう、音は止んでいなかつた。

ぴちゅ、ぴちゅ……ぴちゅぴちゅ……  
音が垂れるような音。足音にそしないが、その音は少しずつこす  
らへ近づいている。

だが、千佳はこんどは震えていたばかりではなかつた。  
奇妙なことにジョンもまた震えていた。

いたずら好きなジョンがこんなにじつとしていたことなんて見た  
ことがない。

「私が……がんばらなきゃ」

ジョンを守る。やう思つた千佳の行動は早かつた。  
ドアに近づき、やつと閉める。もちろん、鍵も閉めた。  
これで、このドアはそつ簡単には開かない。

ゆつくつと近づく音。

千佳は覚悟を決めた。

ぴちゅ、ぴちゅ……ぴちゅぴちゅ……

音はついにドアの反対側に來ていた。  
ジョンの時と同じように音はそこで止まる。  
いや、水でも被つてゐるのだろうか？水が滴るような音がそこでし  
続けていた。

「チカチヤン……アケテ……アイニキタノ……」

しわがれた無表情な声がドアの向こう側から発せられる。  
千佳はびくつとしつつもその声に聞き覚えがあることを思い出す。

「おばあ……ちゃん？」

「ソウ……オネガイ……ココヲアケテ……チカチヤンラオムカエニ  
キタノ……」

おばあちゃんはちょうど一年前の今日亡くなつた。  
火葬後の遺骨だつて拾つた。いるわけがない。  
でも。

(「の声は間違いなくおばあちゃんだ……）

千佳はおばあちゃんつ子だった。おばあちゃんもまたそんな千佳をよく可愛がっていた。

死ぬ間際にすら、まず千佳を呼んだほどだ。

「……おばあちゃん」

ぱつりと恋く千佳。つぶやいた瞬間、愛憎の念が込み上げる。

おばあちゃんに会いたい。

「おばあちゃん、いま……」

鍵を開けるねと鍵に手をかけようとした。

しかし、完全に縮こまつてしまつたジョンが目に入り、嫌な予感が背筋をかけた。

(「のまま、開けたら……まずいよう気がする）

千佳は言いかけた言葉を飲み込み黙り込んでしまひ。

「ドウシタノ、チカチヤン、ハヤクアケテチョウウダイ……」

相変わらず、無表情な声。おばあちゃんはもっと優しい感情にあふれる声を出していくはずだ。

「……だめ。おばあちゃん、開けられないと……」

「…………ドウシテ？」

無表情だった声にわずかに怒氣が混ざる。

おばあちゃんはこんな言い方絶対しない。

「違う！ 違うの！ あなたはおばあちゃんじゃない！ だって、おばあちゃんはもう死んだもん！」

「ソウ…………シカタナイコネ……」

ドアの向こうの声は途端黙り込む。

「…………ごめん、おばあちゃん、『ごめん…………』

千佳は搾り出すように謝罪の言葉を述べる。

「イイノコ、チカチヤン……」

千佳の真摯な謝罪の言葉が通じたのか、ドアの向こうの声は優しくなる。

その声にほつとすると千佳。

だが、次の言葉に千佳は凍りつく。

「ドノミチツレテイクダケダカラ」

笑いすら含んだ不気味な声で静かに声は告げる。

「お、おばあちゃん？」

その声に千佳はビクつと体を後ろに引くとドアから離れる。

直後、ドアの表面が湖面のようになびくと何かが浮かび上がるよう現れた。

身代わり、そして……

月明かりに露になつたのは水を含み膨れ上がつた青白い両手。その腕はによろによろと蛇がのたうつようこ曲がりくねる。やばい。これは絶対にやばい。

急いで千佳はその場から離れる。

脳が、体が、全ての感覚が警鈴を打ち鳴らす。急いでこの場を離れなければ命がない！

千佳の直感がそう告げる。

千佳は即座にジョンを抱きかかえ部屋の端に移動する。部屋の端に居れば腕は届かない。そう思つたからだ。だが、それがいけなかつた。

「キコエタ……ソッチーイルノネ、チカチャン」

声は嘲笑うよつて言つと、曲がりくねる一本の腕はすーっとさりに伸びる。

蛇がエモノに飛び掛るよつて真つ直ぐに向かつてくれる。

「そ、そな……い、いや……むとひたさひ、おかあさん、助け  
てええええ！」

千佳の声は空しく部屋に響くだけだった。どうあがいても今日は両親は帰つてこないのだから。

青白い手はもうすぐそこまで迫つてこた。

「いやああああああああああああああ！」

千佳は泣き叫び、両手で守るよつて体を抱ぐ。

その瞬間、千佳の叫びに呼応するかのよつてジョンが前に出る。

「つかんつー！」

まるで、主を守るかのよつて。

「ジョン！？　だめ、そつこへこつちや……」

千佳の制止の声も空しく。

ジョンは青白い手に掴まれる。

ジョンはもがいたりしなかった。自分のなすべきこと、それを分かつていた。

ジョンは「じゅら」を向いて小さく鳴く。

「わう」

千佳にはそれが別れの挨拶のように聞こえた。

「ジョン——！　だめ——！」

千佳は無我夢中になつてジョンを掴まえた手に掴みかかる。

「うあんっ！　うううう！」

だが、ジョンが千佳に噛み付こうとするので、それは出来なかつた。

それは千佳を近づかせなによつてやるかのよつだった。

「どうして、ジョン……」

ジョンはもう吠えない。「じゅら」も向かない。ただ、静かに。その手に抱かれ、ドアの方へと向かつていった。

ドアは手が生えた時と同じように湖面のように揺れると同時にジョンを吸い込んだ。

千佳は声が出なかつた。

そして。

「チカチヤン、ヤツトキテクレタワネユ……アラ、コソナーケヲハヤシチヤダメデショ？」

べり、べりつ

何かを引き剥がすような音とぼたつぼたつと大量の液体が落ちるような音がドアの向こうから聞こえていた。

千佳はもう動けなかつた。

次の日の夜、両親が帰りつくと家の中には水浸しになつた痕があった。

千佳を叱りついで、部屋に行こうとした父は愕然とする。

千佳の部屋の前のむしられたような毛と血痕に。

そして、壁を背に座つた千佳は目を見開いたまま、ドアの方を凝視していた。

走りよつた父親が千佳に何があつたのかと聞いただと、千佳は一言、「おばあちゃん……」といつだけだつた。

その後、千佳は救急車で運ばれ病院へと搬送された。

脱水症状と食事を取つてないための衰弱が見られたが、命に別状はなかつた。

数日後、千佳は退院した。

しかし、千佳にいくら聞いても、何も思い出せないというばかりでその日何があつたのか父も母も聞くことはできなかつた。

千佳の退院の日、墓を任せている寺の住職から千佳の父宛に電話があつた。

それは、祖母の墓が荒らされたという話だつた。

ただ、不思議なことに墓はあるで内側から掘られたかのようで、次の日にはその穴は埋まつていたということであった。

そして、墓の傍には犬の毛らしきものが落ちていたといつことだ。

## 見代わり、そして……（後書き）

後書き

お読み頂きありがとうございます。

焰氷水です。

季節外れではあります、いかがでしたでしょうか？

実はこの話、まったくのフィクションではありません。

中学生の頃だったと思いますが、飼っていたペットが死にました。今まで元気だったのに、一ヶ月程前から急に元気がなくなりました。そして、忘れもしない6月1日。

天に召されてしまいました。

死骸を埋める時、母がボソリと言いました。

「…今日、おじいちゃんの命日ね。きっと、見代わりになつてくれたのね」

ちょうど、その一年前祖父が亡くなつていました。

「死んだ人が寂しがつて迎えにくる」

多分そんな意味だったんでしょうね。

物語は古来より靈鎮めの力があると言われています。  
願わくば、この作品が彼らの魂に平安をもたらせんことを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2747a/>

---

命日の夜

2010年10月8日15時08分発行